

## 要 約

磯田一雄の「文化侵略」と異文化間教育一九一八以前の満鉄付属地における中国人教育を中心に一」によると、1993年8月8日に中国大連市で開催された「中国東北教育史国際学術討論会」は「実質的には戦前期日本が「満洲. 満洲国」で行った植民地教育に関する日中共同の研究集会」であり、同研究会で多くの日本人研究者は、「満洲. 満洲国」で行われた教育が「奴隷化教育」「文化侵略」であったか否かに、疑問を提議したのである。

その疑問点は主として以下の三点である。

- ① 「満洲国」政府は中国人を「奴隷化」しようとする意図があったかどうかということと、実際に中国人が精神的に日本人の「奴隷」になったかどうか。
- ② 「政策の意図」と「実際に収めた効果」とを厳密に区別すべきである。そういうところを無視して、「奴隷化」＝「皇民化」だけを強調するのは、地域間の違いが不明のままではないか。
- ③ 「満洲」（ないし「満洲国」）でいう「奴隷」とは何だったのか。（slave というよりはむしろ）「奴僕」（servant）に近いのではないか。

磯田の原稿に取り上げられた日本人学者の疑問はいずれも「満洲. 満洲国」における日本の植民地教育を背景にしたものであって、その論点は ①「満洲国」の教育（政府側の教育意図、実現度） ②地域間の教育差（「政策の意図」と「実際に収めた効果」に対する厳密な区別） ③「満洲. 満洲国」でいう「奴隷」の意味合い、に要約できるだろう。

本研究は「これはどちらも日本人の研究者にとっては重要な問題提起に思われるのであるが、どちらに対しても中国側からの直接の反応はなく、議論はされることはなかった。この点はまさに植民地教育問題をめぐっての日中学術交流上の大きな隘路とも言えるであろう。」という磯田の指摘を踏まえ、上述した日本人学者の提議した論点を念頭に、1905～1945年における日本の「満洲」統治下で展開された中国東北地方の教育の様相を考察したものである。

考察の方法は主として①史料による基礎情報の取得 ②ほかの分野との結びつき③「脈絡をつける研究」④現地調査による生の情報の取得 の四つであ

る。

本論文の概要は以下のごとくである。

第一章は、近代中国東北地方の教育の概説であり、「日本による統治機構と教育機構の設立」「東北地方教育の過程と特徴（1905～1945）」「中国近代教育宗旨の変遷」「中国近代における国民の「奴隷根性」について——魯迅の作品を視点到」からなっている。「日本による統治機構と教育機構の設立」では「関東洲」「満鉄附属地」及び「満洲国」における日本の統治機構と教育機構の変遷を紹介した。「教育の過程と特徴」では、まず、『东北沦陷十四年教育』『日本殖民大连四十年史 下册』『中国教育通史 第五卷』『「満洲・満洲国」教育史研究序説 遺稿集』に基づき、日本統治の開始（1905年）から日本敗戦（1945年）まで、中国東北地方の教育過程と特徴をまとめた。次いで、これら各著作の東北地方教育に対する呼び方の違い（奴隷化教育、同化教育、皇民化教育）を取り上げ、「奴隷化教育」の定義及び山根津一、後藤新平、飯河道雄の「満洲」教育に関する考え方と結びつけて、日本による「満洲」教育の動機と傾向を探った。この章の「中国近代教育宗旨の変遷」では半封建半植民地を時代背景とする中国近代の教育を、主として国民党統治区と「満洲」の二部分に分け、その教育過程と特徴をまとめた。中国全体と「満洲」の比較によって、両者の違いがより明確になったと考える。「中国近代における国民の「奴隷根性」について——魯迅の作品を視点到」では、文化や文学の革新、国民性の改善に関心を持っている近代の文化人として、魯迅を取り上げ、彼の主要な作品と言論から中国近代の「奴隷像」を検討した。日本人学者の提議した論点（奴隷化教育の「奴隷」とは何か）を明らかにするとともに、「満洲」教育の評価基準のひとつを明確にすることが本節の目的である。

第二章は、近代中国東北地方における日本語教育の特徴を考察した。「関東洲と満鉄附属地の日本語教育施設について」では、中国人の初等教育を対象とし、「関東洲」と「満鉄附属地」における日本語の教育施設及びその学制と教育方針を考察して、日本語教育の早期化、一般化などの問題点を明らかにした。

「新学制の実施と特徴」では1937年5月に公布された「満洲国」の「新学制」に着眼して、その実施経緯、内容の詳細を紹介した上で、それまでの学制との

比較によって、「教育時間の短縮」「日本語教育の重視」「教科書規制の強化」などの特徴を見出すことができた。「満洲国」教育体系の完成と見られている「新学制」は「満洲国」の教育意図を示したものであり、この分析は「満洲国」教育の実相の解明に役立つものであった。この章の「日本語教育から見る日本の殖民地経営動機」では、各殖民地における日本語教育の推進方法を分析し、国策としての日本語教育の強制性と独占性を明らかにするとともに、「殖民地における日本語教育の意図」「言語と民族との関係」を検討した。この章の最後は「関東洲」時代を生きてきたお年よりたちへの取材を元に作成したレポートである。取材内容の分析によって、「関東洲」における中国人の教育事情をより明確にするとともに、それを中国のその他の地方と比較して、地方間の教育差などを明らかにすることができた。

第三章は東北地方の労働力供出法について考察した。まず「北満入植の原因分析」では日本の「満洲」移民の歩み、各段階の移民目的及び「北満」を入植地にした原因を考察した上で、試験移民期の初の入植地（愛川村）と正式移民期の初の入植地（弥栄村）の現地取材とによって、日本人移民の生活ぶり及び現地への影響の一端を明らかにした。次いで、「関東洲の中国人に対する実業教育の原因分析」では「三頭政治」と呼ばれる「関東都督府」「満鉄」「領事館」の「満洲」経営論を元に、「実業教育」と「資本蓄積」との関係性を論じた上で、中国人教育施設の教育方針と学科設置を中心に、「関東洲」における「実業教育」の展開を探った。さらに、「教育勅語から見る日本道德教育の構成要素」「中国東北地方の中国人教育における奉公意識の浸透」「満洲国の勤労奉公」制度について」の三つの節ではいずれも「奉公制度」をめぐる問題について論じた。このうち「教育勅語から見る日本道德教育の構成要素」は教育勅語の分析によって、日本の精神世界に訴える奉公思想の由来を究明しようとしたものである。「中国東北地方の中国人教育における奉公意識の浸透」と「満洲国の勤労奉公制度」ではそれぞれ精神面と制度面から、「満洲」への「奉公」の移植の詳細を考察した。「奉公の意味合い」、「奉公思想の浸透手段」、「満洲国における勤労奉公制度の展開」が考察の中心である。

上述したように、本論文作成のきっかけは日本人学者の問題提議であるが、

それにすべて回答できたわけではない。本論文は単に、一中国人研究者として、できるだけ客観的に、「満洲」における日本の統治実相と結びつけながら、「日中両国の先行研究の対照比較」「現地取材による実証」などのメリットを生かして、当時の教育の様相の一部を明らかにしようとしたものである。分析過程で、「日本の殖民統治による被害の長期化」「抗日戦争功労者の検証条件の不足」などの新たな問題を発見することができ、今後はそれらの問題を新たな研究課題にしようと思う。